

北信濃戦国武将ゆかりの史跡を訪ねる

一わたりあるく信濃武士一

長野県立歴史館 村石 正行

1日目 **法音寺** 2時～

もとは越後国南魚沼郡の八海山のふもとにあり上杉家移封とともに会津から米沢へ移転した寺院。もとは上杉城内にあり上杉家の位牌、上杉謙信が奉じた毘沙門天、信州善光寺より奉持した善光寺阿弥陀如来三尊（秘仏）を収めている。善光寺縁の宝物を多数収蔵するのでぜひ拝観したい。明治の神仏分離令で、上杉神社と分かれ移転する。

上杉家廟所

法音寺より徒歩でわずかですのでぜひ参詣しましょう。初代謙信から12代斎定まで歴代上杉藩主はここに埋葬されています。東西100メートル南北180メートル、樹齢400年の老杉が整然と並んでいます。近世大名の代表的な墓所として国史跡となっています。

上杉神社・稽照殿 3時～

松が岬公園となっている旧米沢城跡にある上杉謙信を祀る神社。境内には上杉鷹山の銅像が建つ。鷹山の藩政改革に抵抗した重臣層のクーデター（七家騒動）には須田・芋川など旧信州侍の関わりも深い。稽照殿は上杉家の宝物を展示する。甲冑や武具は圧巻です。

上杉博物館 4時～

国宝に指定された上杉家文書を常時展示する。期間によっては洛中洛外図屏風など名品を展示する。

2日目 **常慶院** 8：50～

市河氏菩提寺栄村箕作常慶院を、信夫郡塩松城代から米沢へ移封されたあとに移した寺院。市河氏の墓石は米沢特有の「万年塔」となっており、地域的な特徴を感じさせる。

照陽寺 9：50～

高梨氏の菩提寺でもある。御館の乱で景虎方についた関東管領上杉憲政の墓も見所。

東源寺 10：30～

泉氏の菩提寺でもと飯山五束にあった寺院。位牌堂は信濃縁の檀家名がずらりと並ぶ。尾崎政重画像・座像も拝観予定。

竜泉寺 11：20～

水内郡信更三水にあった竜泉寺。善光寺式阿弥陀如来は鎌倉時代の作であるが大正米沢大火で黒く焼けこげている。

宮坂考古館 12：00～

時間が許せば、前田慶次所用の甲冑を見てみましょう。

学習資料

1 天正十年（1582）の北信情勢

須田満親の登場

川中島合戦では武田晴信についた須田本家と、長尾景虎方についた大岩須田氏に分かれた。武田晴信の北信進出により、大岩城主だった満国・満親は長尾景虎を頼り越後国へ逃避。いっぽう、須田家惣領だった信正は武田氏側についた。永禄四年（1561）の第四回川中島合戦では満親は上杉方の先方として出陣した。なお「川中島合戦五箇度次第」をあらわしたのが井上隼人正と清野助次郎である（県立歴史館所蔵）。

満親の活躍で特に上杉謙信の死後の家督相続の争い（御館の乱）では、景勝方につき功を遂げた。また同時期に景勝の側近となった直江兼統もまた上杉重臣として名を知られるようになる。天正十年には北陸で信長軍と対決した。信長の死後、海津城将として北信四郡を支配。秀吉とも緊密な関係を持つ。

直江兼統と須田満親

直江兼統の幼少時の記録は残されておらずよくわからないが、永禄3年（1560）、長尾政景の家臣樋口兼豊の子として越後国上田庄坂戸城（新潟県南魚沼市）に生まれたと伝えられている。樋口家は、もとをたどると木曾義仲の養親である中原兼遠の子樋口兼光を祖としているという（「中原姓樋口家系図其一」）。また、兼豊は、飯山城将泉（尾崎）弥七郎重歳（歳）の娘を妻とした（「文禄三年定納員数目録 上」）。その縁もあり米沢にある兼統の位牌は、尾崎氏の菩提寺東源寺に安置されている。兼豊の長女すなわち兼統の妹きたは須田満親（須崎市）の長男満胤に嫁している。このように兼統と北信濃の関係は意外と深い。

樋口家の兼統が直江家の養子となったのは天正9年である。そのいきさつは次の通りである。

御館の乱での論功行賞のもつれから、上杉景勝側近の山崎秀仙が毛利秀広が天正九年に殺されてしまった。そこでたまたまその場に居あわせた直江当主の信綱は、狼藉をはたらいた秀広を斬りつけようとしたところ逆に殺されてしまったのである。信綱は景勝の重臣で、その義父実綱は長尾為景・晴景・謙信と三代にわたり仕えた政権の中枢だった。信綱には子がおらず直江家は断絶の危機に立った。景勝は名家が絶えることを惜しみ、同郷の兼統を信綱の未亡人お船に配し直江家を相続させた。

兼統の名前が史料にはじめてあらわれるのは天正8年ごろなのだが、彼の活躍が顕著となるのは、天正10年、北陸での織田信長との対峙が最高潮を迎える「上杉家の危機」の段階であった。当時信長は武田勝頼を攻め滅ぼし、北信濃まで兵を進めていた。また北陸では越中国まで勢力を伸ばし、魚津城総攻撃をおこなっていた。越中の戦況は日に日に過酷を極めた。最前線からの戦況報告は、このときほとんど兼統を通してから景勝へ披露されている。最前線にあたる松倉城には兼統の縁戚須田満親が統括している。この時期の満親から景勝への書状はまず兼統へ送られた。また、北陸在陣の諸侍が兼統に書状を送るときも満親の書状を添えていることが多い。なにより満親の北陸での活動は、兼統が上杉重臣として活動が明確になる時期と一致しており、上杉氏の北陸支配の要として直江兼統と須田満親との間には太いパイプがあったことは疑いがない。満親は北陸の一向宗と水面下で協力し、教如とともに五箇山でゲリラ戦を展開していたり、信濃門徒衆のとりまとめも

依頼されているなど、越後への織田軍侵入を防ぐ防波堤としての役割を果たした。

いっぽう善光寺平から北上する織田軍を水際でくいとめる工作を担ったのが、岩井信能である。

直江兼統と岩井信能

岩井信能はもとは飯山の千曲川左岸地域の豪族の地縁的な結びつきをもった泉一族の一流とも言われるが、戦国時代は中野の高梨氏の家臣であった。御館の乱で景勝方についた信能は、天正7年に飯山領が武田勝頼支配となると、父とともに越後国春日山城下へ移住した。飯山領だけでなく北信濃の武士は、川中島合戦を経て本貫地を守るため武田家に属したのも多くいたが、そのいっぽうで武田の支配を好まず、信濃を離れ上杉家臣として越後で生き延びた武士もいたのである。

天正10年勝頼が滅びると、信長の侵攻の足音がひたひたと越後まで聞こえてくる。

直江兼統は岩井信能と起請文を交わし次のような誓いをたてた。

- ①信濃と甲斐がこのたび立ちゆかなくなったため、すでに越後は難しい局面に立ち至った。岩井殿は無二無三のご奉公の心根であり、頼もしい限りである。
- ②私（兼統）とこのような誓いを神に対してたてたのだから、我らの行末の浮き沈みはもはや運命をともにしたも同然である。
- ③よそで色々とはかりごとを言われることがあっても、いっさい信用しないように。

このように信能は兼統と起請文を取り交わし、景勝のためともに身命を賭けて働く運命共同体となることを誓ったのである。信能はおもに飯山地域の武田旧臣を上杉家へ仕官させ、国境警備を充実させることを強化した。この動きは活発かつ効果的であったようで、景勝本人も「その方の稼ぎで、このたび海津北の諸士をことごとく味方につけたこと、その功績は浅からざる次第」と褒めた。しかし若き信能に対して「このような工作が延々に続くようだと敵に悟られ、必ず滅亡せするから迅速かつ念を入れおこなうように」と釘を刺したほどだった。信能は兼統に対しては「外様衆と呼ばれる泉一族の者が謙信の時代のように再び忠義を尽くしたいと、飯山に侵入した敵を追い込んだらしいが、自分はこんなところにて信州に出陣できないというのは無念だ」とか「この外様（飯山）のものたちを再び上杉家へ取りなしたいから私もはやく外様へ送って欲しい」と心中を吐露している。

こうした取り込み工作は、信能のほか長沼の島津忠直も活発におこなっている。これらの結果、信長滅亡後の天正10年6月以降には続々と北信濃の諸氏が上杉傘下となり、名実ともに善光寺平が上杉景勝の領国となっていたのである。

直江兼統の配下となった高井の武士たち

上杉家臣のうち、兼統の直臣集団を与板衆（江戸時代は与板組）と呼ぶ。北信濃出の武士のなかにも、松木内匠助（高井郡）・白鳥源蔵などが与板衆に数えられる。井上孫左衛門・高梨外記など、はやくから越後に所領を持った一族も兼統直属の武士であった。また西条喝食麿（松代）は兼統から名字を与えられている。名乗りの免許は主従関係の重要な要素である。

天正10年5月、武田旧臣だった坂田采女ほか安部・町田・桜井・加藤・服部・芦川・上原・成田・大峽・市川・宮越・吉原・岩村といった井上十七騎とよばれる面々が兼統のもとへ服属した。これは井上衆と呼ばれ井上達満抱えの土豪集団、いまの須坂市内に出自を持ったものたちである。大滝能安・町田元秀・西沢太右衛門・八町伝助らものちには兼

統配下となっている。北信の武士と兼統のつながりは深かった。

2 会津へ移った信濃武士

表 上杉景勝と豊臣秀吉

天正 14 年 (1586)	上杉景勝、秀吉に謁見し帰順
天正 16 年 (1588)	景勝再上洛 (直江兼統と高井郡須田満親、ともに豊臣姓をもらう)
天正 17 年 (1589)	小田原攻めを命じられる→出羽庄内を拝領
天正 19 年 (1591)	景勝再々上洛
文禄元年 (1592)	景勝 5,000 の兵で名護屋着陣、朝鮮出兵 (~文禄 2 年 9 月)
文禄 3 年 (1594)	伏見城普請に 4,000 名出立。景勝秀吉と謁見 (以後慶長 3 年まで在京)
慶長 2 年 (1597)	伏見城補修のため 4,000 名動員 <このころ景勝五大老になる>
慶長 3 年 (1598)	1 月 10 日秀吉、景勝に対し、会津若松 120 万石に転封を命じる。 8 月 13 日秀吉逝去 (62 歳)

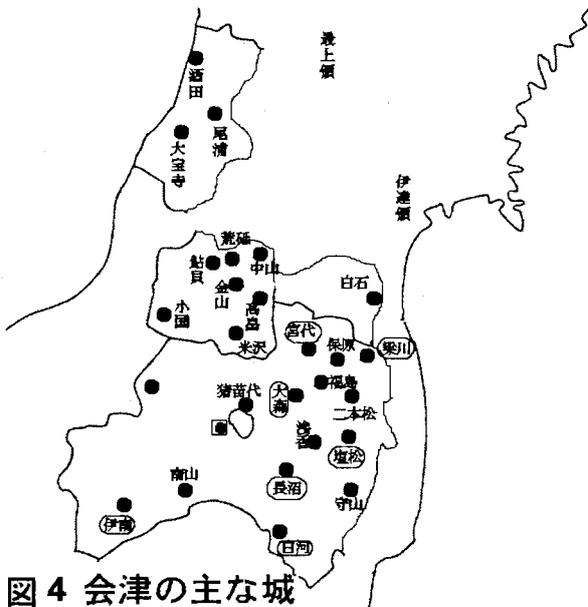


図 4 会津の主な城

1600 年 (慶長 5)

関ヶ原合戦 家康の会津攻めへの備え

① 関東口 白河城 長沼城 ② 伊達・最上氏
対策 梁川城 高島城

③ 越後 (堀秀治) 対策 伊南城

東 軍 : 7 月 24 日下野小山に家康到着 → 2
5 日家康、大坂西征へ作戦変更

上杉軍 : 最上攻め 直江兼統の指揮で与板衆が出陣

信濃武士も多く出陣し、蘆川宣忠、桜井主計らが戦死。

伊達政宗の侵攻 福島城 (本庄氏)・^{やながわ}梁川城 (須田氏) の防戦

9 月 15 日、関ヶ原合戦で西軍敗北 **上杉敗北** 翌年米沢に減封

出身地域	人数	%	備考
上中越	44	36.7	請代直臣が多い
下越	14	11.7	外様旧族が多い
信州	27	22.5	川中島四郡の旧族
先方衆	22	18.3	芦名、蒲生の旧臣
その他	13	10.8	出身不詳を含む

表 千石以上の信州出身侍 (会津時代)

表 北信濃関係武士の所領規模 (会津時代)

地域	城名	人物	石高 (単位: 石)
羽州置賜郡	高島城	春日元忠	4,000
奥州	梁川城	須田長義	20,000
	大森城	栗田国時	8,300
	宮代城	岩井信能	6,000
	塩松東城	山浦景国	6,500
	塩松西城	市河房綱	6,700
	長沼城	島津忠直	7,000
	白河城	芋川正親	6,000
	白河城	平林正恒	3,000
	伊南城	清野長範	11,000

上杉入部前の米沢

蒲生^{がもうじさと}氏郷 (会津鶴が城主) の臣蒲生郷安が入城

蒲生時代の米沢人口1万弱 (侍 2000、農・職人ら 6000 人) 城下は千数百戸

→慶長5年会津から上杉家臣約 6000 騎、その他あわせて約 3 万人が移住

慶長5年 (1600) 関ヶ原合戦→慶長6年米沢・伊達・信夫30万石へ減封

大坂陣出陣 (徳川家康への忠節の証しをみせつける) 慶長19年 上杉勢侍 29 氏約 3,000 名

先方隊 須田大炊介長義 (鳴野表の戦い 大坂冬の陣最大の激戦) →感状・短刀を賜る
市河・芋川・岩井・島津・香坂・夜交・平林・井上・綱島・仁科・西條・大室ら侍組の
半数が出陣、市河房綱、大俣吉元、桜囚獄、関新右衛門、麻績兵左衛門ら戦死

(全 300 名戦死 率：1 割)

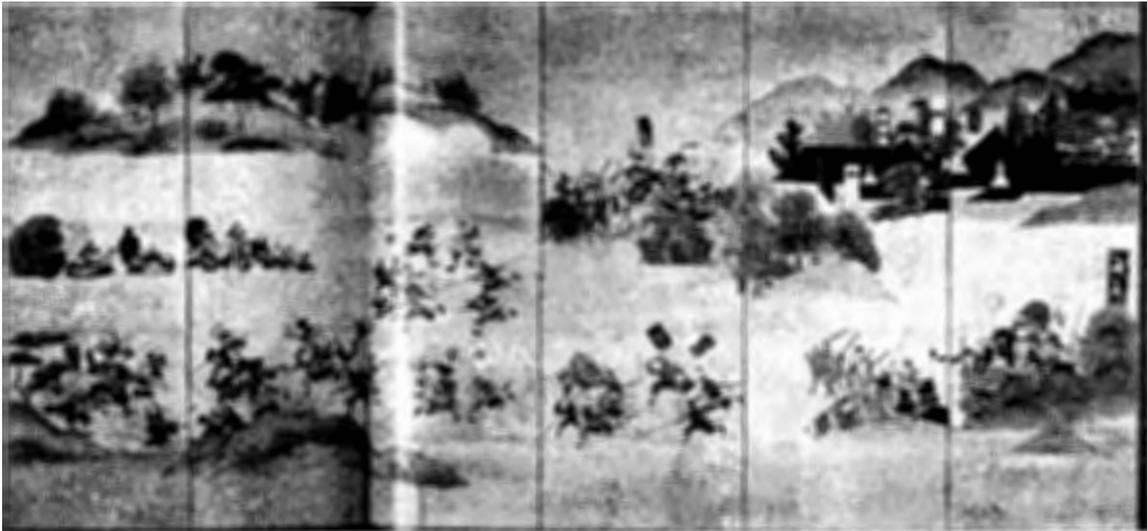


写真 長谷堂合戦図屏風

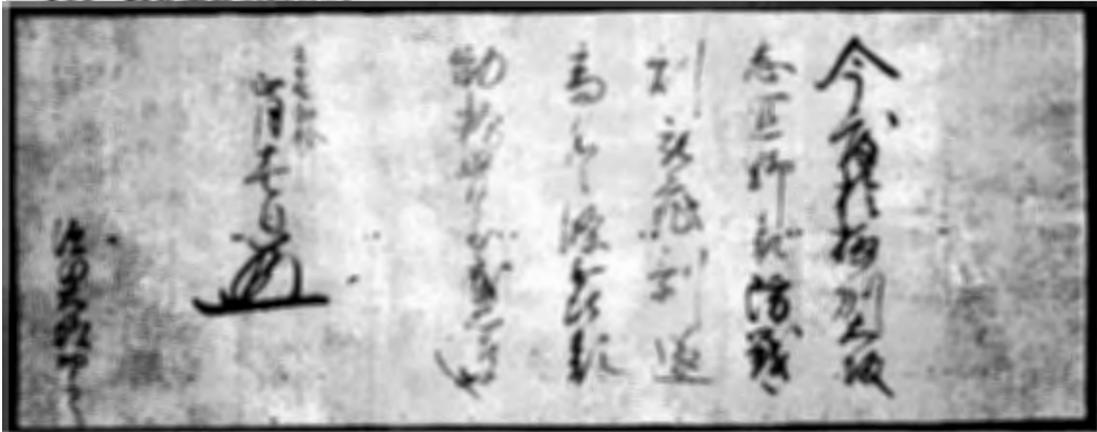


写真 徳川秀忠感状 (須田大炊助長義あて) 史料15

慶長3年 (1598) 正月、豊臣秀吉は上杉景勝に対し、越後・川中島を蔵入地とし秀吉直轄とするかわりに、会津・米沢・信夫を交換し佐渡・庄内とあわせ120万石の大大名として移住させると命じた。兼統は、信濃の長沼・海津城を秀吉奉行石田三成に引き渡し、無事会津へ移住するよう17箇条の命令書を出した。島津忠直・須田満親に対しては念を入れ業務遂行するよう命じた。武士身分のものは足輕に至るまでことごとく家族・中

間まで引き連れること、命に背くものは遠慮無く成敗せよ、という厳しいものだった。ただし武士であっても現在土地を耕し年貢を納める半農については残していくこと、すなわちこの移封では土農分離が徹底されたのである。

突然の命令で、信濃侍もおおいに混乱しただろう。家をあげての議論もあったに違いない。更級八幡宮の神官松田盛直は、神主職を一族の縫殿助に譲る旨の手形を残して移住していった。綿内氏は会津へ移住し小山家を継ぎ、高井郡に残った分家は帰農し代々の文書の写しを大切に後世に伝えた。地域に残ったものは武士の身分を捨てることとなった。

「直江兼統一七ヶ条覚書」(一五九八年)

あいづへ引越候ものとも、おのおの知行知行の人足をもって、荷物以下運び候事、いくかえりも荷物あり次第申し付くべく候。もし百姓等わがままをつかまつり、送り兼ね候はば、成敗申し付くべく候(中略)この中、召使い候悴者の義は申すにおよばず、小者・中間なりとも、今度まかり下らず候はば、則ち成敗致すべき事(略)

謎の死～須田満親

①貝津留守役衆 須田相模守

慶長三年ノ春自殺(「文禄三年定納員数目録」)

②重病ニテ卒(『上杉家御年譜』)

満親の跡を継いだのは2男の長義

長男の満胤(景実)は直江兼統の妹と婚姻した。天正一四年の小田原攻め後の戦後処理では八王子城番頭として活躍。文禄三年(1594)の景勝上洛時には秀吉に謁見し太刀・馬を進上した。しかし慶長二年に勘気をこうむり1900石の知行を没収、京都で浪人となった。この年は多くの家臣が知行召上げとなっている。家臣の領地を減らし上杉直轄領を増やそうとする景勝の政策の一環だったとも考えられている。

満親の家臣はどうなったか?

江戸時代の中ごろの牧村に対する二三か村からの訴状には、牧伊賀守についての伝承が記されている。これによれば、景勝の会津移封に際し、須田満親家中であった伊賀守は老齢のため移住しなかった、という(『高山村史』)。

表2 北信濃関係武士の所領規模(会津時代)

地域	城名	人物	石高(単位:石)
羽州置賜郡	高島城	春日元忠	4,000
奥州	梁川城	須田長義	20,000
	大森城	栗田国時	8,300
	宮代城	岩井信能	6,000
	塩松東城	山浦景国	6,500
	塩松西城	市河房綱	6,700
	長沼城	島津忠直	7,000
	白河城	芋川正親	6,000
	白河城	平林正恒	3,000
	伊南城	清野長範	11,000



須田満親の墓(松代浄福寺)

2年半在京していた景勝は秀吉にいとまを乞い、越後へ戻ることなく会津へ入った。雪深い会津へ移住完了したのは3月末であった。しかしこの年秀吉は病没し、天下の形勢をうかがう徳川家康と、秀吉の執政石田三成との反目、そして慶長5年関ヶ原の合戦へと至る。関ヶ原の合戦の端緒は三成と気脈を通じた景勝を家康が討伐することに始まる。景勝はあらたに神指城を構築するなど家康に備え、梁川城（福島県伊達市）の須田長義や高島城（山形県高島町）の春日元忠のように伊達・最上氏への抑え、白河小峰城（福島県結城市）の芋川正親・平林正恒、長沼城（福島県須賀川市）の島津忠直のように関東口への抑えなど、外敵の監視や防備を充実させた。また、兼統から伊南城将清野長範への書状などを見ると、三成の使者が会津へ頻繁に訪れ兼統がこれに対応していたことが伺える。

米沢城の兼統は配下の与板衆を率い、最上領内へ侵入した。最上義光の長谷堂城を攻撃し山形城を狙うが、義光みずからの激しい抵抗をうけ攻略しあぐねた。江戸時代に最上家の絵師が描いた屏風には、兼統と与板衆の攻撃のようすが描かれている。兼統は鉄砲隊を率いており、その書き込みには春日・高梨・芋川・綱島など信濃侍の名前が記されている。兼統は鉄砲製造に力を注いだといわれ米沢に鉄砲屋町を建設した。ほかの信濃侍でも高山仁助や町田元秀は鉄砲衆を任され、尾崎家には鉄砲扱いの口伝書が伝わる。木島又次郎は

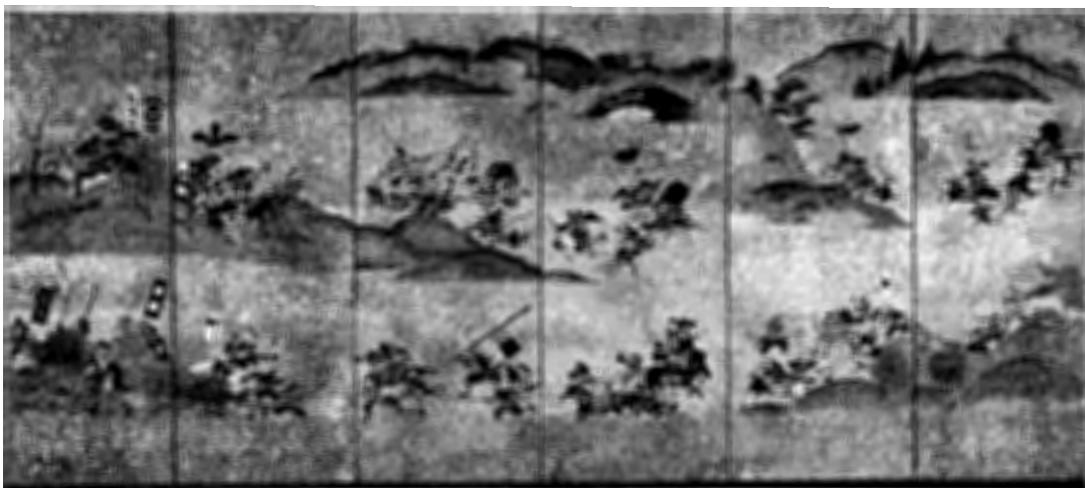


梁川城三の丸土塁 伊達政宗が須田長義を攻める

鉄砲衆を預かりこれを差配するよう高梨頼親から命じられている。八町伝助と北村孫兵衛は兼統の命で鉄砲の買い付けを任されたという。

関ヶ原で三成が敗北したという報を受け、兼統は急遽米沢へ兵を戻した。このとき最上勢に追撃で奪われたという与板衆の旗がいまでも残る。

慶長6年、家康に恭順を示した景勝は、その後家康への忠誠を誓う。信濃侍の運命も大きく変わることになる。



長谷堂合戦図屏風 左上が与板衆

3 米沢藩30万石の上杉氏と信濃武士

家名断絶を免れた上杉家だったが、家禄は会津・米沢・信夫・庄内120万石から米沢・信夫30万石へ減封となる。米沢はこのとき兼統が城将であったがもとは伊達政宗領だった。天正19年蒲生郷安時代の米沢城下は千数百戸で人口1万弱だったという。ここに会津120万石の上杉家臣約6000騎、その他あわせて約3万人が移住した。会津若松城の引き渡しと米沢への移住については、兼統の側近春日元忠、平林正恒が完了させた。

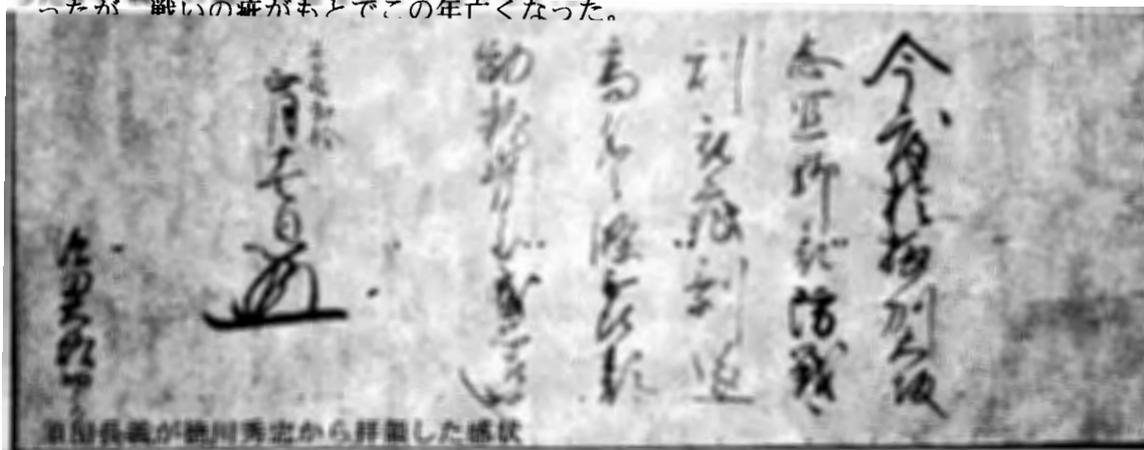
米沢の町づくりには平林正恒が城下町建設の奉行となった。米沢城の四方を家臣団ごとの屋敷割り編成をおこない城東地区には奉行・江戸詰家老・侍組、城南地区は謙信以来の古参の武士である馬廻組の居住地区とした。城西地区には景勝側近の五十騎衆が集住し城北は与板組とよばれた兼統の陪臣が住んだ。城下外には下級武士の集住地区を建設した。

慶長19年10月、景勝に徳川秀忠からの飛脚が届いた。豊臣討伐の兵を挙げよ、というものだった。景勝は江戸の手勢を率い上洛し、米沢の兼統に対しては軍勢を整えて従軍するよう命じた。家康・秀忠と面会した景勝は11月25日には大和川南岸の鳴野表しぎのおもてに陣を張った。翌26日、大坂方の木村重成きむらしげなり・後藤基次ごとうもとつぐ隊と鳴野表で戦った。

上杉軍の先鋒は須田長義であった。長義は配下の石坂新左衛門に命じ敵方に対して鉄砲100挺を撃たせた。両軍は膠着状態となり石坂ほか20名余りが戦死した。先鋒の苦戦を知った第二陣の安田能元やすだよしもとは、脇から須田隊に救援をさしむけ体勢を持ち直させた。挽回をはかることのできた長義は、単身敵中に切り込み、敵将竹田兵庫と取組み合ったすえ、これを討ち取ったが深手の傷を負った。長義の配下で現在の須坂出身、田子三介・真野次郎助・北村茂助・青木五助なども戦功をたてた。

おなじく高井郡出身で兼統の配下坂田義満もこの戦いで豊臣秀頼の槍師範、穴沢盛秀を討ち取った。駒形太兵衛は謹慎中だったが功名をあげるため密かに大坂入りし、義満とともに穴沢一族を討ち取った。米沢帰国後、晴れて赦免され御徒組に召し抱えられた。

直江兼統の妹を妻に持つ須田満胤も謹慎中だった。その子満統は母とともに本庄家に身を寄せていたが、この戦いで功をあげ侍組に仕官できた。米沢へ移住していた北信濃出身の上杉家臣のうち、このいくさに出陣したのはこのほか市河・芋川・岩井・島津・香坂・夜交・平林・井上・綱島・仁科・西條・大室などであった。このいくさで、市河房綱、大俣吉元、桜囚獄、駒形与兵衛、関新右衛門、麻績兵左衛門らが戦死した。須田長義は秀忠から感状と短刀「来国俊」を受領した。上杉家臣のなかで刀を拝領されたのは長義だけだったが、戦いの砦があとでこの年亡くなった。



4 米沢に残る信濃武士の足跡

武士は戦いに明け暮れるイメージがあるが、様々な文化的素養を様々な手段で入手し広範なネットワークの中でこれらを活用していたことはよく知られている。兼統についても和歌や漢詩に長じていたことはよく知られている。漢詩文は、京都の五山寺院の僧たちとの交流、とくに妙心寺僧南化玄興や相国寺西笑承兌を師とし深められた教養であったことが明らかにされている。天正16年（1588）の連歌会では景勝の発句に対し岩井信能・須田長義・清野範真が二の句以下を詠じたことが知られる。

さて兼統は元和5年（1619）61歳で江戸で没した。嫡子景明は若くして没しており、兼統は養子も取らなかったため直江家はここに断絶した。

兼統の遺骸は米沢の徳昌寺に葬られた。徳昌寺はもとは越後国与板の直江家の菩提寺であった。この徳昌寺が上杉家の菩提寺である林泉寺と所領をめくり相論となった。檀那である直江氏の庇護を失った徳昌寺の僧は与板に引き上げ徳昌寺は廃絶してしまった。そこで、兼統夫妻の墓は林泉寺に、位牌は真福寺に移されることとなった。

兼統の亡き後、藩政を取り仕切ったのが兼統の与板組番頭平林正興であった。正興の父正恒は更級郡の出身、兼統の片腕で米沢奉行職をつとめていた。この正興の手で正保2年（1645）、位牌が東源寺に移された。東源寺はもと飯山にあった泉（尾崎）氏の菩提寺であったが上杉氏の移封とともに会津上名倉（福島市上名倉）に移った。ついで岩井信能が花沢（米沢市東）へ移転させ、中興開基となった。岩井氏は慶長3年まで飯山城将を勤め、泉氏の一族とも伝えられている。直江兼統の母は泉氏の出であると言われているから兼統の霊所としてのちに平林正興がこの寺を選んだのは、この由緒を大切にしたいからに他ならない。

東源寺には高さ90センチの兼統の位牌がいまでも安置されている。位牌堂には開基の



東源寺の直江兼統の位牌

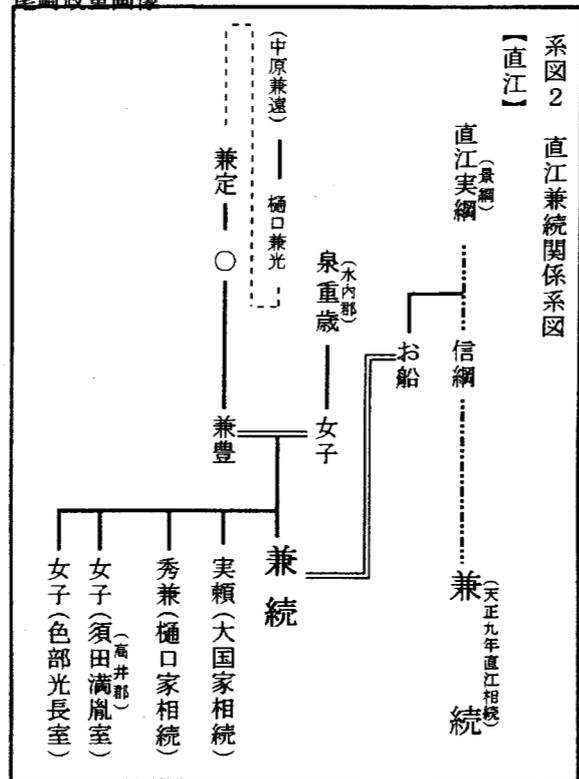
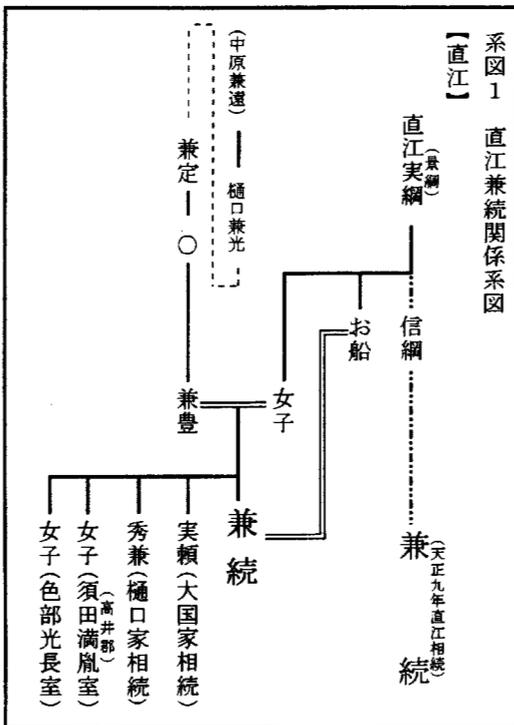
尾崎政重の座像のほか、岩井・平林といった寺ゆかりの信濃侍の位牌が所狭しと安置されている。兼統と信濃との関わりを現代に伝える歴史的な場であるとも言ってよいだろう。



位牌堂 岩井家の札



尾崎政重画像



5 移転した寺

表 奥州に移転した信濃の寺院

寺院名	地域	宗派	開基伝承
1 常慶院	米沢市南原	曹洞宗	開基市河能房 水内郡栄村の常慶院を、関ヶ原合戦後米沢へ分立させ中興
2 禅透院	米沢市中央七	曹洞宗	開基大永六年清野山城守善照 清野家菩提寺
3 長命寺	米沢市中央三	一向宗	景勝の時代に越後春日山へ移転、その後会津・米沢へ移転。
4 東源寺	米沢市中央五	曹洞宗	開基尾崎政重 慶長三年会津へ移転、同六年米沢城下花沢へ移転。
5 龍泉寺	米沢市大町	浄土宗	創立慶長三年 本尊善光寺式阿弥陀如来三尊は水内郡から伝来するという。
6 耕沢寺	米沢市太田町	曹洞宗	八代(屋代)安芸守の建立。
7 栄松寺	米沢市桜木町	浄土宗	創立文禄二年 武田ゆかりの寺。慶長三年会津、ついで米沢へ移転。
8 西明寺	米沢市遠山町	真言宗	創立建長年間 信濃越後国境に北条時頼が訪れた際創立 開山は二階堂信濃入道と伝
9 浄円寺	米沢市中央五	一向宗	創立慶長六年 高田浄興寺一四世(長沼浄興寺出身)福田善芸が米沢へ来住建立。
10 照陽寺	米沢市城南	曹洞宗	創立永禄元年 信濃国海安寺龍古が越後国春日山に創立 会津・米沢へ移転。
11 法音寺	米沢市御廟	真言宗	越後から米沢に移転、善光寺より招来したという阿弥陀如来三尊を護持するという。
12 興国寺	伊達市梁川	曹洞宗	開基須田長義 梁川城将須田長義が菩提寺高井郡興国寺を分院して建立
13 泉秀寺	国見町	曹洞宗	大滝甚兵衛実安が父信安の菩提のため建立
14 金剛院	福島市飯坂町	曹洞宗	岩井信能が父菩提を弔うため建立
15 常円寺	福島市松川町	曹洞宗	奈良沢家菩提寺
16 嶽林寺	月館町	曹洞宗	上倉昌安開基
17 仏母寺	福島市笹木野	曹洞宗	上塚善正が建立しその母を開基となす
18 成願寺	福島市大波	曹洞宗	中曾根義清の建立 開基義安

6 その後の信濃侍 藤沢周平『漆の実がみのる頃』はこのことを記した歴史小説
 七家騒動 上杉家上杉治憲の側近による「藩政改革」派と、古参重臣層の「謙信回帰」派
 芋川延親・須田満主・清野祐秀・平林正在・千坂高敦・色部照長・長尾景明
 尾崎家の資料調査 1741年(元文6年)五束村・尾崎村等へ由緒を尋ねる書簡をだす。
 これに対して返答を五束・安田・尾崎・有尾・五荷の関係社寺が返答
 を出す

おわりに

明治新政府となり、武士身分が廃止された。米沢藩士のなかには、北海道屯田兵として苦
 難を覚悟のうえ移住を決意したものもいた。そのなかには、信濃出身の市河氏・平林氏・
 立岩氏などがいた。須坂関係では松木氏がいた。明治23年厚岸村に入った米沢出身者は、
 太田屯田兵村を建設した。現在、松木氏の兵屋が記念館として残されている。



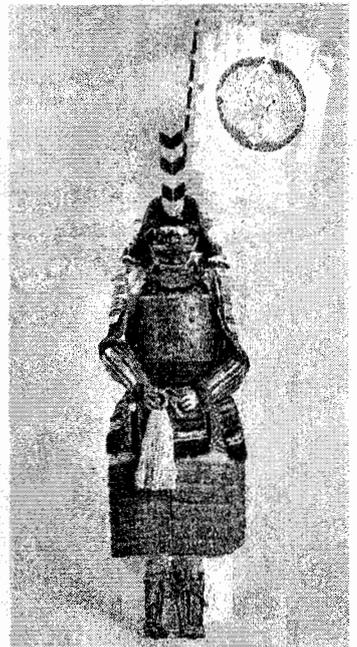
しのの 歴史再見

を抱えるまでになる。八の手に始めに竹俣当綱の殖代重定の時代には凶作と放漫財政で借財が増大。重定は隠居し、養子となつた治憲(鷹山)が跡を継いだ。

治憲は家臣に「君臣の力が尽くるほどの大使約を取り行えば、家が立ちゆくかもしれない。いまの苦難が、将来の当家の安泰となるとの気概でおのの心をひとつにして尽力して欲しい」と大俵の約令を発し、みずからもち四代綱憲は能舞台や書院の新築などで財政悪化を招き、二十万両の借金を素を旨とした。財政再建

異聞 上杉 武田と信濃武士6

処断された重臣たち



芋川氏伝来の甲冑(米沢市上杉博物館蔵) 県立歴史館で展示中

この竹俣のほか改革派と千坂高教、色部照長、江らの排斥を求めた。治憲称される善哉社(せいが)戸家老・須田満主、侍頭は父重定に相談して返答(しゃ)の面々であった。長尾景明、清野祐秀、すると答えたが、七人は急激な改革に真つ向から、臣七人は治憲に四十五箇なかつた。これを聞いた反対した。ことに奉行、条の訴状を提出し、竹俣重定が重臣を吐責。三日

後、須田、芋川を切腹、革によつて好転し幕府家名断絶、そのほかを閉から譲えられるまでにな門警居とした。七家騒動と呼ばれる。改革派と守革は、古い藩政に決別し旧派との抗争であった。たものとして、今日に語り継がれている。処断された重臣は、千坂氏、長尾氏は上杉家代々の家老職。須田氏は信濃侍筆頭で海津城將勢力のレツテルを陥ら須田満親以来の重臣。清れたままである。謙信公野氏(松代出身)、平林氏こそ撫るべきだと訴えた(信更出身)も、謙信や彼らもまた、上杉家景勝以来の古参重臣で、う気持ちは変わらなかつた。景勝を縛り返し、数々のたのだが。村石正行、県立歴史館(「異聞 上杉、武田と藩財政は治憲の行政改 信濃武士」おわり)

しのの 歴史再見

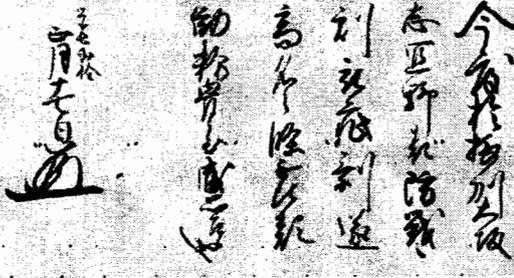
慶長五(一六〇〇)年、

関ヶ原合戦で石田三成は徳川家康に敗れた。三成と気脈を通じていた上杉景勝は、このときほど家名存続を危ぶんだことほなかつたに違いない。事実、百二十万石だった上杉家の石高は三十万石に減らされた。以来、いつ改易となつてもおかしくないと考えた景勝は、徳川家に忠節を尽くし、家の存続をはかる。

慶長十九年十月、江戸参勤のため米沢を免つた景勝に、徳川秀忠から飛脚が届く。豊臣秀頼討伐のため兵を挙げよ、というものだった。景勝は江戸の手勢を率いて上洛し、米沢の直江兼統に軍勢を整えて従軍するよき命じた。騎馬三百五十騎、雑兵約九千人が動員され

たとえられる。十一月(坂市)出身の須田満親のから救援を差し向は、十二月に家康・秀忠と面会して名高い。勢を持ち直させた。長義は単身敵中に切り込み、岸の鳴野表(しぎのおも)に命じて鉄砲百挺を撃つたすえ、これを討ち取つた。大坂方の木村重成、なつた。しかし敵の軍勢、敵を撃退した。後藤基次隊と戦つた。世が雲霧(うんか)の如く、米沢へ移住した北信濃にいう冬の陣最大の激押し寄せ、石坂ほか二十の戦(いくさ)に出陣した。上杉軍の先鋒は須田長義。先鋒の苦戦を知つた高井郡(須第二陣の安田能元は、脇井上綱島(仁科)西條、大室など待合とよはれた中、上級の武士の半数であつた。しかし激烈な戦いで、市河房綱、大俣吉元、核因球、駒形与兵衛、関新右衛門、麻績兵左衛門らが戦死。出陣した九千名のうち約三百名が亡くなつた。ことに志久見郷(下水内郡米村)出身で上杉家老たつた市河房綱が重臣が死亡し、景勝の払った代償は大きかつた。しかし、こうした働きによつて上杉家の存続は認められた。

鳴野表 須田長義の活躍



須田長義への「徳川秀忠感状」(個人蔵) 県立歴史館企画展(8日から後期)で展示

長義は戦の翌年、秀忠から感状と短刀(来国俊)を受け、上杉家臣のなかで刀を拝領したのは長義だけだったが、戦の疵(きず)がもとで、この年亡くなった。(村石正行・県立歴史館 専門主事)

しのの 歴史再見

慶長五(一六〇〇)年、

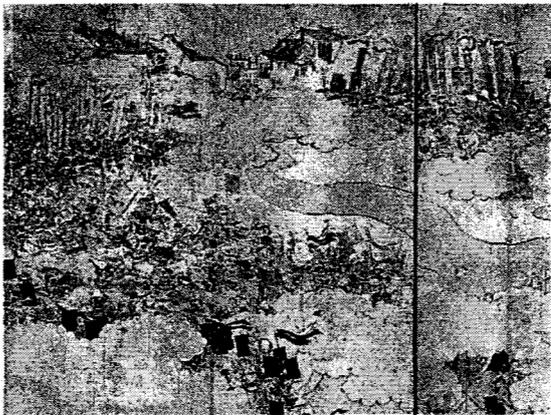
戰場はおのが功名をたてる場所。上杉家が存続の危機にあつた大坂冬の陣では、家臣のなかで人間くさいドラマが繰り広げられた。

坂田采女(うねめ)義満は、井上十七騎と呼ばれた、高井郡の井上氏配下の地域小武士連合の一員。現在の須坂市坂田地域を拠点にしていたものと思われ、のちに上杉家に従つて米沢藩士となつたことが『御家中諸士略系譜』によつてわかる。この系譜では川中島合戦のときは坂田氏は武田信玄の配下であつたらしい。武田家滅亡後に上杉景勝の家臣となつた。上杉氏が家名存続のために激闘を繰り上げた大坂冬の陣に、義満はほか

の井上十七騎の衆とも、敵も兼統の配下であつたに直江兼統の配下として、主人の叱責を受けて出陣。鳴野表(しぎのおも)の激戦で、豊臣秀頼の槍術の師、穴沢主殿、救免を乞ひたいと願つて助盛秀を討ち取つた(徳川実記)。敵方大将の師範の首はこのつえない武功であつたろう。この乱戦のなかには、熊意の侍がいた。熊意の様子だつたのだから、その姿を見た義満は、みずから取つた敵将の首を熊意に譲つてしまつたのである。熊意はこれによつて功名をあげた。この話、本当か嘘か? 鎌倉時代以来、戦(いくさ)での功名は自己申告であつたが、必ず第三者の見知人(証人)が必要だつた。義満と熊意のやりとりの見知人となつた、信濃出身の松本助兵衛高次は、ありのまます証言した。こうして、熊意の功と温情が激賞されたのである。

手柄譲つた坂田義満

異聞 上杉・武田と信濃武士③



大坂冬の陣図屏風(左翼、鳴野表の戦いの部分) 東京国立博物館蔵 県立歴史館で8日から公開

おなじく信濃侍の駒形太兵衛も勘気をこらめていたが、功名をあげるため密かに大坂入りし、義満とともに穴沢一族を討ち取つた。景勝は、家臣を通じて「具足着用のまままでよいかつたたちに家康・秀忠公の陣所へ行き報告せよ」と伝えた。徳川両將軍を喜ばせた太兵衛は、米沢に戻ると晴れて救免され、御徒組(おからくみ)に召し抱えられた。(村石正行・県立歴史館 専門主事)

もうひとつの「川中島」



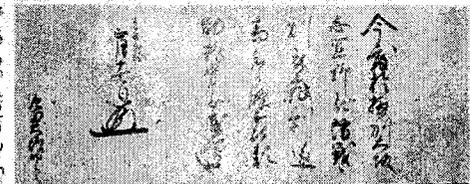
第四章 地域国人たちの栄枯盛衰

風林火山

▽ 24 △

〈毎週土曜日掲載〉

須田氏



須田長義あて「徳川秀忠感状」(同)

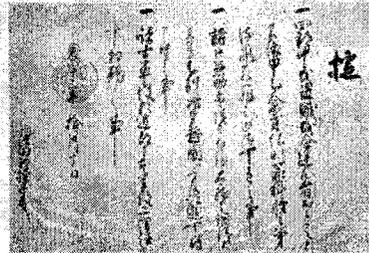
海津城代に任命された池上裕子氏(成隊大文)の背後、上杉景勝から学術教授)が述べるように、北陸での満親の古文書には、武田氏以来の歴代城代に与えられていない。要務が記されてきた。すなわち、奥四郡の諸侍の軍事動向、検断権(警察権)、裁判権である。

年には北信領内で検地を行い、決裁した。1598(慶長3)年正月、秀吉は上杉景勝を会津120万石に転封する命を出した。上杉領内の武士身分の者はすべてこれに従わなくてはならない厳しいものだった。満親は会津移封に反対したという。その後、満親は海津城で謎の死を遂げたという(「上杉家御年譜」)。

満親へ権限が委譲

北陸での働き評価される

研究ながの「一五」。満親は景勝側近として幅広い人脈と交流があった。例えば信長の死後、柴田勝家と羽柴秀吉が後継者をめぐり対立していたころ、室町幕府前将軍足利義昭から満親へ書状が届いた。北信濃武士では満親が唯一であった。翌年には満親は朝廷から従五位下に叙せられ相模守に任じられた。一方、天正18年の小田原征伐の戦功で景勝は出羽庄内52万石を増され、満親は酒田城代に任じられた。文禄3



満親あての天正13年「上杉景勝朱印状」(片山光一氏蔵)

景勝に働きかけた。結果的に景勝は秀吉に臣従した。1588(天正16)年の末には景勝に従い、満親は秀吉に謁見(えっけん)した。改姓していた秀吉から、景勝らは「豊臣」の名乗りを許され、感状と短刀を与えられた。須田氏は江戸時代中ごろの七家騒動を経て知行高を大幅に減らされたが、幕末まで2500石で存続した。(村石正行「景勝史」) 館野門主事兼学芸員(写真)の「上杉景勝朱印状」「徳川秀忠感状」は、いずれも今年秋の景勝史館「武田・上杉・信濃武士展」で大坂冬の陣図屏風とともに公開される。



もうひとつの「川中島」



第四章 地域国人たちの栄枯盛衰

風林火山

▽ 25 △
(毎週土曜日掲載)

仙仁氏

仙仁温泉(須坂市)がいたことはあまり知られていない。仙仁温泉から南西に入った仙仁山地を由来とした(応永6)年、朝廷より駿河守に任じられた

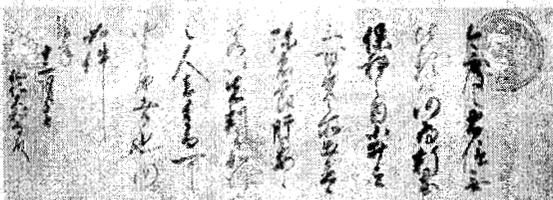
武田や上杉に仕える

若穂保科に所領持つ

毎日新聞) 須坂市仁礼地区は戦国時代に仁礼衆と呼ばれた地侍集団が居住した地域だ。この集団の中に仙仁姓を名乗る武士

は武田家、そして上杉家と仕官先を変えた家系で、その歴史は古い。

口宣業(くせんあん)の未印状をもらって上杉家臣となった。この中で福島城将須田信正の討ちとす旨が記され、仙仁氏は上杉家臣となった。仙仁氏も信濃を去ったが、米沢藩では御典医として幕末まで仕えたという。一方、兵農分離の原則で武家身分を捨て北信濃に残った一族もある。現在でも仙仁家墓所は保科広徳寺で守られている。(村石正行・県立歴史館専門主事兼学芸員)



弘治2年「武田晴信朱印状」(仙仁秀泰氏所蔵)。保科、小井豆の地名が見える。このほか5通の中世文書があり、いずれもこの秋、県立歴史館「武田・上杉・信濃武士」展で里帰り展示する

「仙仁家系図」に記される特殊な文書で、大きな文書、筆と仙仁風も口宣業の形状に合致する正文である。大原氏から一族で須田に伝わる文書として極めて珍しいものである。戦国時代、仙仁氏は若穂保科に新たな所領地を持っていた。仙仁温泉から妙徳山・熊窪山の山間地を山越えた場所である。おそろく須田信正と同様、武田晴信にすぐ服従したの



仁徳寺(長野市保科) 仙仁氏の菩提(ぼだい)を弔う

1556(弘治2)年の春山城(長野市)の攻防での戦功をたたえ、晴信は仙仁定泰に対し朱印状を与え、保科のうち小井

もうひとつの川中島



第四章 地域国人たちの栄枯盛衰

風林火山

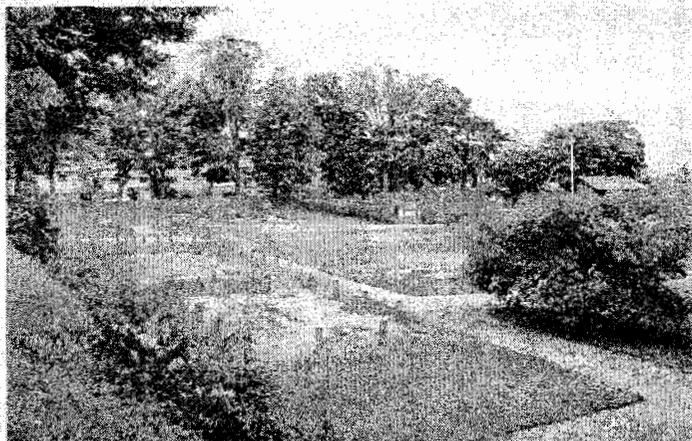
▽ 39

△

〈毎週土曜日掲載〉

高梨氏土塁の跡を歩く人々

中野市宇小館にある 約100坪。四方に堀
高梨氏の館跡(小館) および土塁を巡りし
は07年2月、中世の城 公園整備のための発掘
館跡として
は県内唯一
の国史跡の
指定を受け
た。館跡は
東西約13
0m、南北



中野市高梨氏館跡

北信濃に覇をととなえ 越後侍として給人に変化

野の地を離れた。
1556(弘治2)年6月、長尾宗心と名乗っていた豊虎は、二度にわたる信濃出陣の理由について信州が隣国であることはもちろん、武田の信濃侵攻により、村上、井上、須田、島津、栗田氏他の面々が自分を頼って来たこと、わけても、かねてからよびの高梨氏を見捨てることができない、と川中島出陣に高梨氏救済の意図が大きいことを自ら記している(『歴代古案』(降幡浩樹・長野市立博物館守書室))。

調査では建物跡12棟と門跡、庭園跡などが確認された。現在は市民憩いの公園として親しまれている。
この館の主、高梨氏は須坂市高梨を本拠とし、所領を広げた。永正年間(1504-11)には中野の中心部、小館にそれまでの中野氏に代わって本拠を移し、北信濃の北部に覇をととなえるようになっていたとされる。高梨氏は川中島の戦いが始まる前、おのの長尾景虎(謙信)を頼って中野に居た。武田家滅亡後の1582(天正10)年、春日山にいた高梨頼親は、豊勝の北信濃進出に合わせて旧地の一部を回復させた。しかし、本願の小館の館は既に小島内藤に与えられていた。もとも同族であった小島氏は、夜交(よませ)氏とともに武田方にくみし、高梨氏を離れていった。高梨

特別寄稿 米沢城下に於ける仏教寺院

下平 忠正



向こう三軒両隣が寺院で構成されている米沢市東寺町の一角

下平忠正氏
昭和6年(1931)
米沢市一の町生まれ
県立米沢興譲館高校、
山形大学教育学部卒業
県立米沢商業高校に勤
務以来、日本史担当教
諭として県立米沢東高、
同長井工業高を歴任。
現在、山形県文化財
保護指導員に委嘱され
活躍中。

米沢城下を散策していると、寺院が一寺孤立して存在するのではなく、軒並み連続して「寺町」を形成していることが特徴的に理解することができると、然も中を覗き見ると、疑灰岩で作られた格子戸を持ち、入母屋作り屋根で覆われたお墓が古色蒼然として立ち並んでいる。内部には五輪塔が入れられ、米沢では「万年堂」と(万年塔とも)呼ぶ。

これら米沢の寺院を大きく三つに分類することができよう。

一、謙信祀堂(御堂とも)に

奉仕する真言二十一ヶ寺

慶長十四年(1609)六月五日、本丸の東南に高さ四間の土塁を築き、そこに御堂を造り謙信を祀ると共に、本丸直下の堀を隔て、二の丸に寺院を造るよう指示している。この寺院には能化衆や御堂衆を住ま

わせ御堂の仏事に専念させた。此等の寺院(人々)は法音寺(醍醐三宝院末)の指揮下に入り、門徒として御堂の奉仕に専念する義務があり、知行も蔵出で五十石を給付された。

この二の丸に在った寺院は現在には跡形もなく、昔の様子を偲ぶことさえできないが、江戸時代の二百六十年を通して米沢城下の中心をなした寺院であった。

二、定勝の育成所、藩士の学問所

としての禅林文庫から法泉寺へ

元和四年(1618)十一月、九山和尚を迎えた景勝は、直江兼統を普請奉行として米沢の産土白子明神の西に臨濟宗禅林寺を開山させた。九山の指導のもと、足利学校と五山文学を併せた内容で、米沢藩の学問所が出来上がった。

定勝は十五歳から九山を学問師範

として修学し、「古文真宝」等を講釈する域に達したと云われる。また、九山和尚も妙心寺住職となり紫衣を許されている。

慶安元年(1648)に法嗣絶山が禅林寺を引継ぎ、学問所「禅林文庫」の鎮守として文殊堂を創設し、綱勝の学問師範となるが、以降は儒学者が藩主の学問師範を勤め、禅林寺も定勝の女(松平飛騨守夫人・法泉院殿浄因永心大姉)を祀り、寺号も法泉寺と変えてからは性格が全く変化してしまった。

三、米沢に在来の寺院と

越後から随従してきた寺院

米沢の城下は城郭を中心として諸士屋敷・町人屋敷(商人・職人)・寺屋敷が同心円上に町割りされている。その城下から蛸足状に外側に街路が伸び、その軍事上の要所に寺町が置かれ、特に「東」と「北」がはっきりしている。

会津若松から綱木峠を経て米沢に入る街道は、泉町から七軒町に入る

と昔は南寺町と云い、四ヶ寺があった。

東寺町は、一つには福島から板谷峠を経て白旗松原から福田大橋を渡って福田町に入り、東町に到達する道筋の南側にある。二つには白石から七ヶ宿街道を経て高島町から上郷川井村に出て川井小路から市内に入る道筋の北側にある。

北寺町は山形から赤湯を経て北町・長町から桐町に至る道筋の東西にあり、寺屋敷数は二十五軒を数えた。

小松から中街道を経て徳町に至ると、北寺町西ノ丁が東側にあるが、長慶寺(もと徳昌寺の一部)、信夫町に入つて竜言寺がある。小松から西街道を経て成島から成島町に入ると昌願寺、市街入口では松原寺がある。

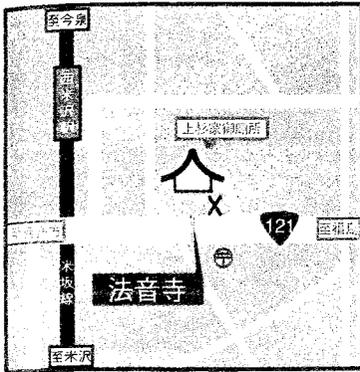
市街の西側では会津・喜多方から田沢を経て館山に入る道路が伸びているが、この大峠線は公式の街道でないせいか在郷民の菩提寺が殆んどである。例外的に御廟の法音寺が御

廟前であるが、明治維新によって祀堂の触頭である法音寺が此処で上杉家の菩提を祀る職務を命じられて移転したものである。館山口町に入ると僅かに千勝院・信光寺等がある。従つて西寺町の名称が用いられたことは全くない。

それらの寺町の存在は城下守備と云う軍事上の必要から考えだされたものであるが、封建時代の城下町には何処にも見られたものである。米沢では伊達時代の寺院が、江戸初期の城下町建設にあたって整理統合されて寺町の一郭を構成したものである。

また、江戸時代二百六十年中に姿を消した寺院も少なくない。明治維新にあたって神仏分離・廃仏棄釈の荒波をかぶつて消滅した寺院もある。

特に、修験道は明治五年九月に廃止され、すべての寺院は無くなり、残った修験者は天台宗か真言宗に帰属させられた。



・JR米沢駅より西3.5k
 ・山交バス御廟下車3分
 ・境内西側駐車場(バス2、車20台)



上杉歴代藩主の御廟所

本堂に上杉家歴代藩主の位牌をまつる霊屋、善光寺如来尊並びに県指定文化財の宝物4点、泥足毘沙門天(謙信帰依)、菅谷不動尊などを奉安する。

また境内には幸寿丸墓、矢尾板三印墓、景勝への殉死者墓池田成章墓、上杉茂憲公句碑などがあり、隣接して国指定史跡の上杉家御廟所がある。



陽春には枝垂れ桜に彩られる法音寺山門、その奥に本堂がある。

住所 米沢市御廟一丁目

5-32

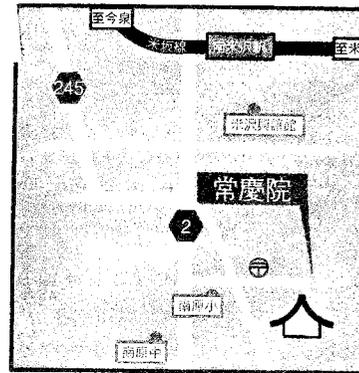
電話番号 0238(22)2095

FAX 0238(21)0817

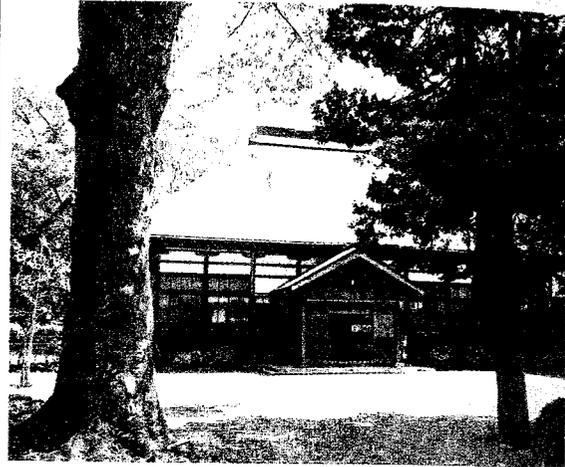
ほうおんじ 八海山 法音寺

- 住職 中興四十四世 高梨良興
 - 宗旨 真言宗豊山派
 - 創立 天平九年(737年)
 - 開山 聖武天皇の勅命寺
 - 開基 行基菩薩
 - 本尊 大日如来
 - 本山 奈良原 長合寺
- 天平九年、越後魚沼郡藤原里(現の新潟県六日町)八海山の麓に行基菩薩が聖武天皇の勅命により創建した真言宗豊山派の名刹である。慶長六年、上杉景勝公が米沢移封の際、僧能海が随従し、同寺を上杉城内二の丸内に造営した。正保二年には「院室兼帯」の号が贈られ、寺格

は中本山となり、米沢領内真言宗の総元締となった。慶長以来、城内御堂(謙信祠堂)の供養職筆頭寺院であったが、明治の廃藩置県、破城令などによって明治三年、歴代藩主の廟所の守護を勤めるべく現在地に移り、上杉家の菩提寺となる。以降、「専修学林寺」として僧侶の養成を主務としてきたが、終戦後は一般寺院として自主体制をとり、西部幼稚園など併設、今日に至る。「主な行事」 ●元旦修生会 ●春彼岸中日 大般若会 ●五月十五日 青葉まつり ●秋彼岸中日 秋彼岸法会



・山交バス白布高湯線
 南原中前下車8分東南約800m
 ・境内入口に駐車場(20台分)



しょうけいいん 金華山 常慶院

- 住職 三十八世 金藤良一
 - 宗旨 曹洞宗
 - 創立 応永五年(1398)
 - 開山 明翁覚永大和尚
 - 開基 市川越中守能房(市川斗見城六代)
 - 本尊 釈迦牟尼仏
 - 本寺 白鷹町 瑞龍院
- 二代景勝と従兄弟に当たる本悦和尚が法脈を継ぎ、上杉家とは関係深い曹洞宗の名刹である。室町前期の応永五年、市川斗見城六代の市川越中守能房を開基として創建された。市川氏は代々曹洞宗に帰依し、長野県下水内郡栄村に常慶院を開創している。

キツネのくれた分福茶釜

寺宝として伝わる分福茶釜は群馬県館林市の茂林寺にあるタスキの分福茶釜とは兄弟釜と言われ、上杉謙信が愛用した上杉家の定紋入の三宝に安置されている。

疫病が大流行した年、この釜で炊いた饂飩を食した病人が次々全快という縁起書がある。



弥八郎狐が本悦和尚に土産としたと伝わるキツネの分福茶釜

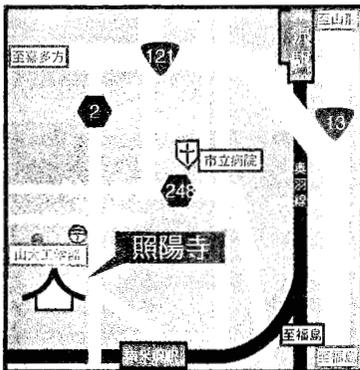
住所 米沢市南原横掘町

2844

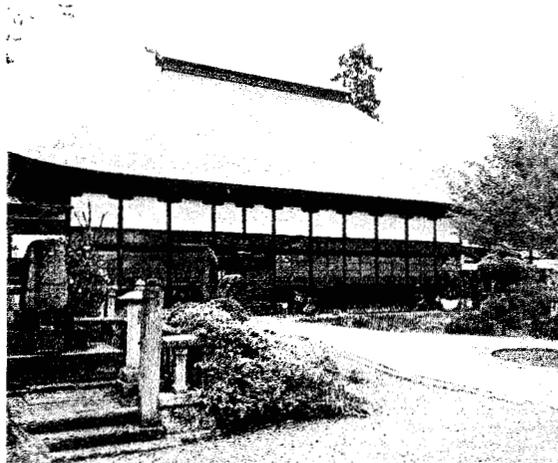
電話番号

0238(38)2606

また、八代市川治部大輔信房は代々属してきた武田家を離れて謙信に誓詞をもって味方した。以後、明治維新に至る長い歳月上杉家と共に歩むことになる。六代能房の孫、本悦は、幼少より出家して信州常慶院にあったが、関ヶ原合戦のあと上杉家と共に米沢に移り、米沢常慶院を中興する。本堂裏の墓地に上杉藩再興の功臣、竹俣美作当綱の墓があり、墓碑銘は鷹山の師細井平州の撰書である。なお、万年堂群は知将直江兼続の創案とされ、同院は上杉家一色の感が深い。



・米坂線南米沢駅より西300m
・山交バス城南4丁目下車、3分
・門前に駐車場(15台分)



しょうようじ 白瀧山 照陽寺

上杉軍団の武具秘蔵

境内には本堂、開山堂はじめ由緒秘める五輪塔、万年堂などが整然と建ち並び、上杉家ゆかりの寺らしい格式ある佇まいとなっている。寺宝もまた上杉軍用の先陣用具が多数保存され、武勇を誇る戦国武将の往時をしをばせる。



関東管領の要職にあったが、永禄4年、管領職及び上杉姓を謙信に譲った上杉憲政公の墓

住所 米沢市城南5丁目

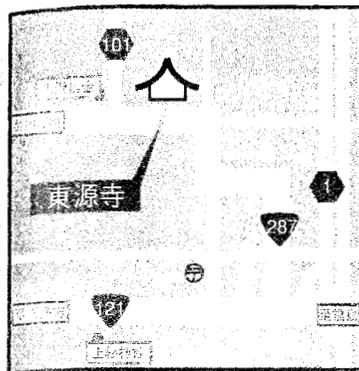
1-16

電話番号

0238 (23) 1586

■任職 三十二世 伊藤吉定
■宗旨 曹洞宗
■創立 永禄元年(1558)
■開山 大徹宗令禅师
■開基 上杉憲政公
■本尊 南無釈迦牟尼仏
■本寺 神奈川県大本山總持寺。末寺一カ寺
上杉憲政公が戦陣の守護神とした虚空蔵菩薩をまつり、憲政公の墓がある曹洞宗の寺院。
信州海安寺の徒弟、龍古和尚が雲水行脚し、越後の国春日山の南に白龍山生養寺という一寺を開創した。開基は当時、関東管領の上杉憲政公。同寺は元龜三年照陽寺と、後に山号

も白瀧山とそれぞれ改められた。慶長三年、上杉家が豊臣秀吉の命によって会津に移封された時、同寺もこれに従い、次に徳川家康により再度国替えのあった同六年、米沢の地に移転した。
当時、南原の地に仮堂を造営したが、寛永十一年、現在地に堂宇を建立した。
降って正保二年の南溪天乘和尚代に憲政の守護神、福満虚空蔵尊を安置する堂宇を建て、また明和四年に金毘羅堂を造立した。
嘉永六年、本堂、庫裡を全焼したが、同年再建し今日に至る。



・中条病院より東100m
・境内に駐車場(30台分)
・山交バス中央5丁目下車1分

縁者の面影捜し祈願

大羅漢堂に安置の五百羅漢像は寄木造りで鈎物性の顔料を使って美しく彩色。さらにその一人一人が異なった表情を持つ独特の仏像群。

このため、参詣者は身近な親、兄弟、血族の面影を宿す仏像を探し出しねんごろに祈願する習わしが古くから続いている。



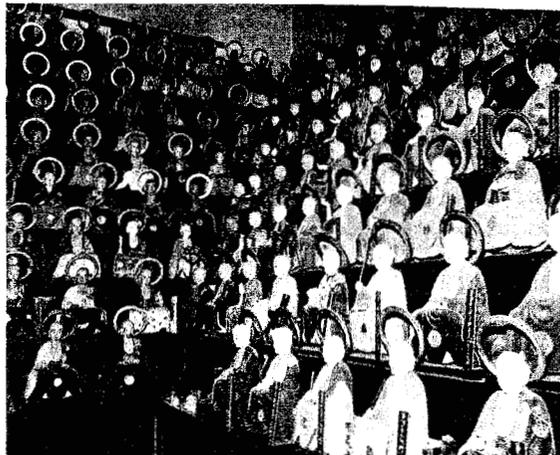
緑樹に包まれ清楚に佇む東源寺本堂

住所 米沢市中央5丁目

2-31

電話番号 0238(21)0125

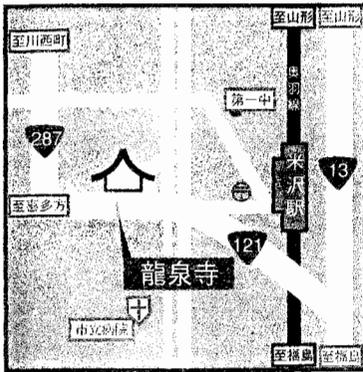
FAX 0238(21)0126



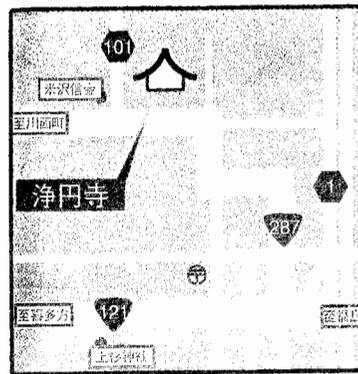
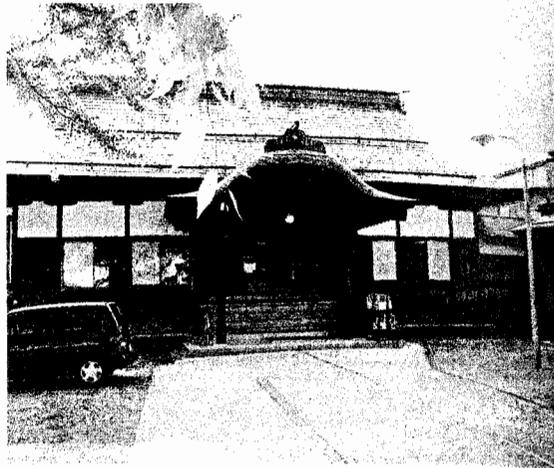
とうげんじ 万用山 東源寺

■任職 三十七世 楠裕行
■宗旨 曹洞宗
■創立 文明八年(1476)
■開山 明翁覺永禅师
■開基 尾崎政重
■本尊 釈迦牟尼仏
■本寺 白鷹町 瑞龍院
上杉藩ゆかりの大悲観世音菩薩、五百大羅漢を寺宝とする曹洞宗の古刹。信州飯山城の大守尾崎政重を開基として文明八年創建された。慶長三年三月、上杉景勝が豊臣秀吉の命により会津に移封された際、これに従って寺も檀家の士族と共に会津領に移り、この寺閣は現在も残

っている。その後、景勝が徳川家康の命により慶長六年、米沢に移った際も同寺は当地花沢村に転住、堂宇は同年十月一日、造成された。正保二年八月十八日、直江山城守兼統夫妻はじめ嫡子平八の霊牌を安置する牌寺となり、上杉家奉行職の平林正興の下屋敷(現在の境内)の土地の寄進を受けて寺閣を建立、現在に至る。
また、天明の大飢饉に心痛めた同寺二十七世の宗岳大和尚は五穀豊穰を祈願し、広く有縁の志を勧誘し、米沢郷士の仏師遠藤亀次に五百羅漢を謹刻させ民衆の安寧を祈願した。



- ・JR米沢駅より西1k
- ・山交バス相生町下車、1分
- ・境内に駐車場(20台分)

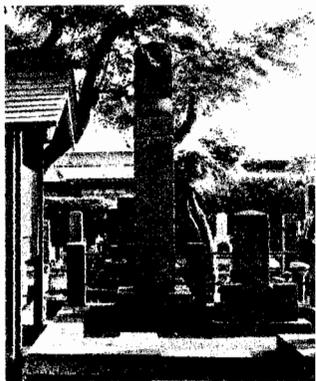


- ・米沢市玄北部小より南東700m
- ・境内に新駐車場(10台分)
- ・山交バス中央5丁目下車4分



色調鮮やかな涅槃像軸

寺宝として伝わる涅槃像掛け軸(幅15m、縦3m)は、1,250年前、唐より伝来した草木染の総刺繍の逸品。紅のない時代の作ながら鮮やかな色調が施され、年1回、1日だけの供養、公開のたび鑑賞者を感嘆させている。



忠臣堀桑之助の墓

住所 米沢市大町4丁目
1-46

電話番号
0238 (23) 2455

りゅうせんじ 大沢山 龍泉寺

住職 二十四世 芳賀誠純
宗旨 浄土宗
創立 慶長三年(1598)
開山 嘆蓮社良贄上人
開基 長井庄地頭大江時廣
本尊 阿弥陀如来
本寺 京都市 知恩院

一光三尊、善光寺式の阿弥陀如来を安置し、長井庄の地頭、大江時廣を開基とする浄土宗の古刹。
慶長三年、嘆蓮社良贄上人により開山されたが、大正六年の米沢大火で寺史及び財宝の一切を焼失。
本尊の阿弥陀如来座像は鎌倉時代

作の木彫金箔張りの優物。また、一光三尊、善光寺式の金銅阿弥陀如来立像はもと信州水内郡栄村にあったが、領主上杉景勝の転封と共に米沢の地に移ったと伝えられる。
火災後再建された現在の本堂は明治神宮など設計した建築界の第一人者として著名な伊東忠太博士(米沢市出身、文化勲章受賞者)が直接手がけた由緒あるもの。また、同博士が伊東家先祖の菩提を弔う五輪塔二基が建ち並び、博士の偉業、孝心をしのぶ郷党の香華がいまも絶えない。また、戊辰の役で自刃した会津藩の忠臣堀桑之助の墓がある。

歴史を物語る大ケヤキ

境内の北西側にそびえる樹高20mに達する大ケヤキは同寺9世和尚の移植とされ、樹齢140余年の銘木である。
一方、元禄の頃、植栽されたと伝えられる百日紅は本堂前を鮮やかに彩り、参詣者を和ませている。



門前を彩る大銀杏

住所 米沢市中央5丁目
2-37

電話番号
0238 (23) 4269

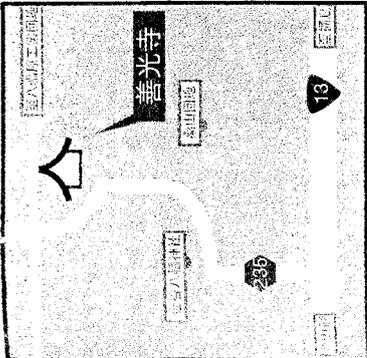
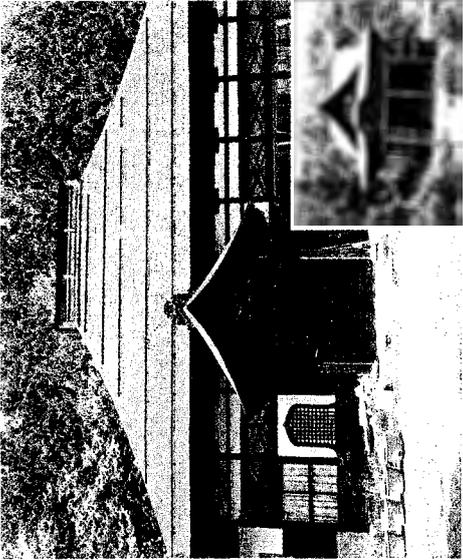
じょうえんじ 歓喜踊躍山 浄円寺

住職 十七世 長沼利生
宗旨 真宗大谷派
創立 慶長六年(1601)
開基 稲田善芸法師
本尊 阿弥陀如来
本寺 京都市 東本願寺
樹齢百四十余年の大ケヤキが茂り、東本願寺十二世宣如上人より賜った本尊をまつる真宗大谷派の寺院である。
慶長六年三月二十日、越後から会津に移封した上杉景勝に従って会津に来た善芸法師(新潟県高田市、浄興寺十四世)が一寺を建立したのが始まりとされる。



本堂正面に上げられた山号額

この傍証として本尊阿弥陀如来像の裏書に寛永十一年仲夏にて、東本願寺十二世宣如上人とあり、願主として浄円寺三世源了とあった。
また、宣如上人の印と願主に同三世の名が記してある。以下、聖徳太子、七高祖真影にも同上の裏書が添えてあったことが明らかである。



・八幡原工業団地より南500m
・山交バス八幡原団地下車、10分
・境内に新駐車場(30台分)

県重文の見返り如来

善光寺式の三尊仏をまつる阿弥陀堂は徳川8代將軍吉宗の頃の延享2年に着工、5年後の寛延3年に改装された由緒深いもの。

寺宝の阿弥陀如来立像は「見返り如来」と称され、比類のない優美さで県重要文化財に指定されている。



見返り阿弥陀如来 (県文化辞書より)

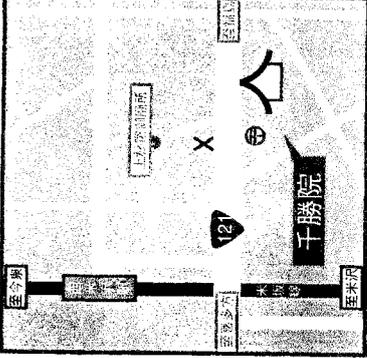
また、光本聖仁の多くの僧が写した大般若経が山寺に残る。

住所 米沢市万世町堂森

375

電話番号・FAX

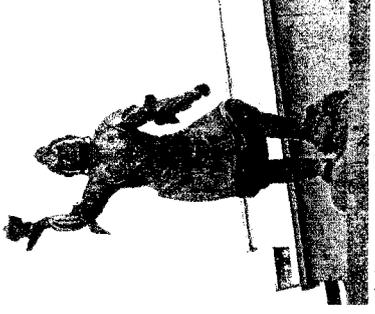
0238 (28) 1638



・上杉御廟所より東300m
・山交バス城西1丁目下車、2分
・境内に駐車場(10台分)

天にはためく「毘」の大織り

180坪の境内に本堂、唐裡が立つが、刀八毘沙門天王を祀る本堂内に安産子育地藏、火伏不動明王を共に奉じてある。また、本堂裏にNHKの大河ドラマ「天と地と」を記念して建立された青銅造りの毘沙門天王像が目撃を奪う。



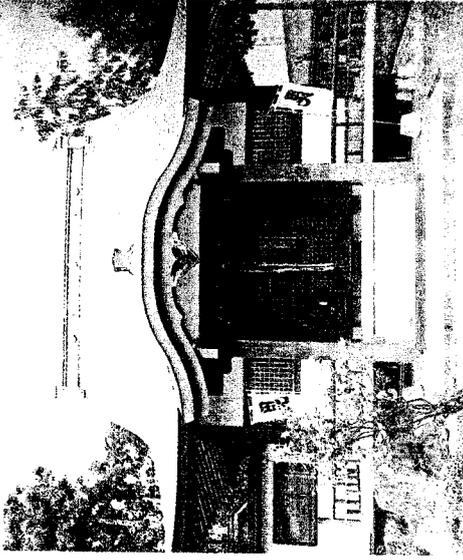
青銅づくりの毘沙門天像

住所 米沢市城西1丁目

6-10

電話番号

0238 (23) 2995



せんしよいいん 善日山 千勝院

- 住職 十四世 喜持院素寛(永勝院兼務)
- 宗旨 真言宗醍醐派
- 創立 天文年間(1532~155)
- 中興 開山 大阿闍梨有栄
- 本尊 刀八毘沙門天
- 総本寺 京都 醍醐寺

上杉謙信の守護本尊である刀八毘沙門天を拜受、これを本尊としてまつる真言宗醍醐派の寺院。

天文年中、大阿闍梨有栄が越後の国高田に開創、謙信が出陣の都度その戦勝を祈願した。初めは千手院と称したが、謙信が十七度戦って十七度の勝利を取めたことにちなみ千度戦えば千度勝つとして千勝院と改め

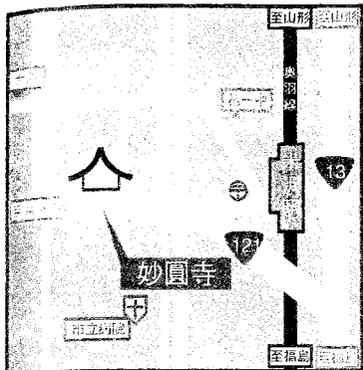
たとされる。また、毘沙門天の「毘」の一字を白地に大書し、本尊の代わりに戦場に揚げたことから「毘」の軍旗を「御旗本尊」と称した。

二代景勝は越後から会津に転封、さらに慶長六年、米沢に封ぜられたが、この時、秀鉄法印が景勝に従い、米沢市南原に寺領を賜り、のちに館山口の現在地に移建した。

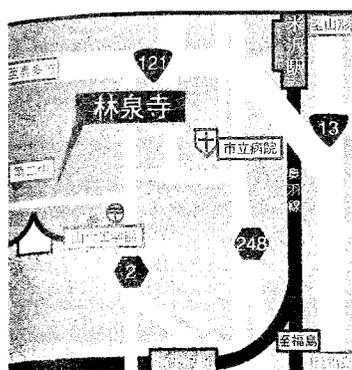
明治四十年、火災にあつて一切を焼失したが、昭和十七年、時の米沢市長登坂又蔵の奔走により現本堂が再建された。

〔祭事、縁日〕

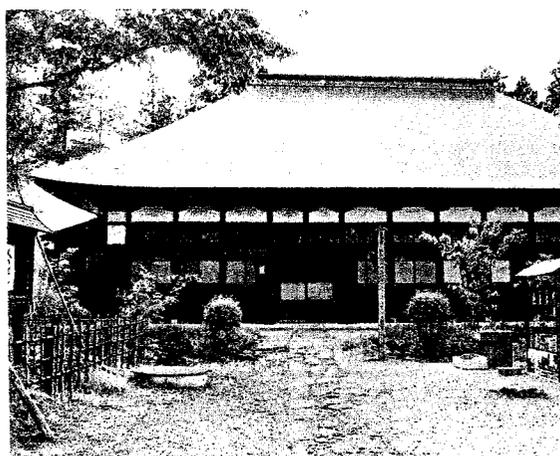
●十月十八日 例大祭



・JR米沢駅より西1.4km
・山交バス大町4丁目下車2分
・境内に駐車場(10台分)



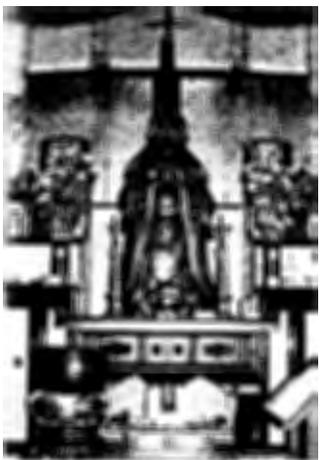
・山大工学部より西100m
・境内に新駐車場(30台分)
・山交バス工学部前下車5分



県内最大の鬼子母尊神

楠の一本彫で造られた七尺の大きさで、県内最大の鬼子母神は厄除け尊神として、県内外からの参詣者が絶えない。

なお、家庭児童相談カウンセリングも受け付けている。



県内最大の鬼子母神

住所 米沢市大町4丁目 3-9
電話番号 0238(22)5466
FAX 0238(22)1088

本因山 妙圓寺

- 住職 三十九世 安藝宗祥
 - 宗旨 日蓮宗
 - 創立 嘉元四年(1306)
 - 開山 久成坊日尊聖人
 - 開基 不詳
 - 本尊 本門寿量の御本尊
 - 本寺 京都市 要法寺
 - 総本山 山梨県 身延山久遠寺
- 鎌倉後期日蓮大聖人入滅後、二十四年目の嘉元四年八月八日、玉野太夫阿闍梨日尊聖人の開山。同年八月十五日に正八幡大菩薩を開眼供養。以来「米沢八幡」「柳町八幡堂」として尊崇され、伊達政宗もよく参詣

したという。慶長三年、直江兼続が米沢に入部した時には柳町は妙円寺ただ一軒あるのみで、四丁四方、三万坪の境内を有した、山形県最古の日蓮宗寺院である。

米沢八幡と厄除け鬼子母神は両尊堂として祭祀されている。数度の大火によって記録を焼失したが、市歴史資料により七百年の歴史を垣間見ることができ。

〔祭事、縁日〕
 ●元旦祈禱会 ●鬼子母神取子祈願
 ●盂蘭盆施餓鬼会 ●開運皇祭
 ●信行会(毎月行事)

文化財秘める宝物館

広い墓地に二代景勝公の正室菊姫(人形浄瑠璃の八重垣姫モデル)や保科正之の娘で会津夫人と呼ばれた媛姫の墓がある。一方、境内の宝物館には啼鶴双幅、十六羅漢(十六幅)岩山團扇等、上杉城下町にふさわしい文化財が保存され、一般参詣客に公開されている。



大改修された山門

住所 米沢市林泉寺1-2-3
電話番号 0238(23)0601
FAX 0238(23)0629

春日山 林泉寺

- 住職 五十五世 菊池伸之
 - 宗旨 曹洞宗
 - 創立 明応五年(1496)
 - 開山 宗猷大光禅師曇英慧應大和尚
 - 開基 越州大守 長尾能景
 - 本尊 釈迦三尊
 - 本寺 群馬県雙林寺
 - 末寺 三十一ヶ寺
- 創建以来、長尾・上杉家歴代の信仰厚く、名将直江兼続廟所としても著名な曹洞宗の名刹である。
- 天文七年、米沢上杉の始祖謙信は七歳の時当寺に入り、七世天室光育禅師のもと参禅に目覚めた。二代景

勝は会津から移封後の元和三年、菩提寺林泉寺を越後高田から現在地に移した。

その後、名君と謳われた上杉鷹山が十七歳で家督相続した折に同寺春日大明神の真前に立志の誓詞を捧げたなど、同寺の格式をしのばせる数々のエピソードが伝わる。

若むす直江兼続夫妻の万年塔、武田信清の五輪塔(共に県史跡)が建ち並んで往時をしのばせ、いまでも香華が絶えない。

〔祭事、縁日〕
 ●元朝祈願・盆行事・ふれあし観音
 ●臘八摂心・日曜参禅会